【清元】　文売り

文政三年（1820年）一月　江戸玉川座

本名題　花紅葉士農工商（商の段）

作詞　近松門左衛門

作曲　初代　清元齋兵衛

同じ身過ぎもさまざまに　目出度き春の懸想文

これは恋路を売り歩く　文玉章の数々は

口説上手に惚れ上手　または相惚れ片思い

縁のたねを結び文　これも世渡る　習いかや

（文売り）「さあさあ　これは色を商う文売りでござんす

私が商う文の数々は、宵の睦言　まだな事　まぁ聞かしゃんせ」

流れ忙しき憂き勤め　替わる夜ごとのその中に

惚れた男の意地悪う　オットよしても暮れの鐘

その手で深みへまた俺を　かける心と見てとった

どりゃと立つのを引き止めて

今日は取り分け色々と　言うこと聞くこと　たんとある

その約束で今朝早う　ござんす筈を憎らしい

初に逢瀬の後朝に　送る出口の嬉しさを

心に思うありたけを　言い交わしたを何じゃいな

野暮な口説の只中へ　降って脇から只一人

（文売り）「同じ廓に小田巻という傾城が　毎晩送る　文の数々」

三万三千　三百三十三本ほど　指に廓の文使い

返事の無いに腹立てて　顔に紅葉の打掛けを

とって脱ぎ捨て私がそば

（小田巻）「これ　かつみさん　いやなお方に惚れはせぬ

今までお前が大事にしたアノさんを

今日から私に下さんせ」

貰いに来たと　ずっかりと　こっちも日頃の癇癪酒

（厚美）「これ小田巻とやら　くだ巻きとやら

せっかくお前の　御無心じゃが　もう百年も経った後

松葉を添えて主さんあざよう」

仇　馬鹿らしいと言い様に　突きのく弾みに、ばたばたばた

縁から下へ落ちの人　あご痛たたと泣き出す

騒ぎの声に小田巻が　遣り手　引き舟　仲居　飯炊き

出入りの座頭　按摩取り　神子山伏に　占やさん

雪駄片しに下駄片し　草鞋掛けで来るも有り

台所から座敷まで　太夫さんの仕返しと

ここでは打ち合い　抓り合い　銚子　燗鍋　踏み返し

そりゃこそ津波が打ち混ぜて

隠居が子を産む　ヤレ取り上げて

ソレかつお節よ捕鉢よ　がらがらピシャリっと鳴る音に

桑原くわばら観音経　秘蔵な子猫が馬ほどな

鼠を喰わえて駆け出すやら　屋根では鮑が踊るやら

神武以来の恪気いさかい　このこと世上に知られけり

よどまぬ水に月影も　暫し留むる逢坂の

関に残せし物語　勇ましかりける次第なり